

のメッセージを掲載しています。震災に負けず奮闘している被災者の姿が波動となって、被災者のみならず、全国・全世界の会員に希望と勇気を送っています。

#### (四) 地域や行政との連携

学会の組織では、日頃から地域活動を通して行政とのコミュニケーションをはかっています。会館や敷地を地域行事の会場として開放し、災害時には避難所として安心して使って頂けるよう、近隣との友好に力を注ぎ、信頼関係の構築に心がけてきました。

#### (五) 全国の支援ネットワーク

震災発生直後より、全国各方面から支援の手が差し伸べられました。学会本部から指示が出る前に必要物資を

かき集め、途中の道路が寸断されていたため、フェリーで海を渡って岩手に駆けつけた北海道の組織をはじめ、青森、秋田、山形、新潟、関西、東京と、被災地である東北への強力かつ迅速な救援体制が敷かれました。

現在は「災害対策本部」を「復興本部」に移行させ、長期的な支援体制を敷いています。被災三県の六地域を「復興特区」に指定し、八箇所「復興支援センター」を設置。全国から青年部職員が交代で派遣され、支援が継続されています。

私たちはこれからも人間に内在する無限の可能性を信じ、お互いが助け合い、支えあえる社会の構築を目指しながら、東北・宮城の心の復興に全力を尽くす所存です。

#### 支援する宗教者

## 被災地の人々とのご縁から学ぶ

### — 災害復興支援と立正佼成会の社会的役割 —

立正佼成会 社会貢献グループ次長／一食平和基金事務局長

保科和市

ほしな わいち

#### 仮設住宅談話室での出会い

(釜石の「お茶っこサロン」)

「ここからは、観音さまが見えるんですね」。座卓を挟み三人の高齢の女性と向き合い、沈黙に耐えられず発した私のその言葉に、仮設住宅の隣人を誘ってきてくれた存在感溢れるおばあちゃんが応えてくれた。「うん。あの観音さまは、ここからだと思ひや見えなけれど、前から見ると胸に大きな鮭を抱いてるんだ。そして、漁に出て行く船を見守ってるんだ」。すると、もう一人の声が続いた。「そうだ、私も行ったことがある。一度行ってみ

るといいよ。「へー。そうなんですかー。行ってみたいな」。そこから、地元の花産物等の話に花が咲き、会話が弾み始めた。やがて、亡くなった身内の思い出や孫と見に行った全壊の自宅の様子にも話が及ぶ。今は、仮設住宅に住んでいるが一人ひとりのおばあちゃんたちは、あの震災と津波の起こる前には旦那さんと勇ましく漁に出ていたり、老舗の女主人として娘夫婦と立派に店を切り盛りしていた人だったり、それぞれの家族と仕事と生活を持っていた。その多くのかげがえのないものが失われた。

釜石市社会福祉協議会が東日本大震災被災者支援の一



環として仮設住宅で行う「お茶っこサロン」に、平成二四年三月から本会も参加してきた。毎週の金、土、日曜日に数か所の仮設住宅で談話室や集会場を借り、仮設住民の方に心やわらぐ語りの場を提供する。お茶やコーヒー、ジュース等の飲み物や菓子を用意し、アロマの香りも利用するなどして、喫茶店のようなゆったりとくつろげる環境を整える。本会からは、全国各地にある教会（地域組織）より毎週交代で四人の有志の会員が参加して、仮設住民の方を迎え、もてなし、相手の心に寄り添いながら話に耳を傾ける。騒がしくならないように配慮しながら、戸別に訪問してお誘いもする。

本会の参画は、既に前年から活動している他の諸団体に比べると遅蒔きである。平成二四年三月の第一回以降、一月二四日現在までに同市内一二カ所の仮設住宅に対して二三八回の「お茶っこサロン」を実施し、延べ二、七〇四人の住民が来訪利用された。本会から参加したボランティアの数は老若男女合わせ延べ四一八人である。住民には、惨事ストレスを受けている方もいるので、相手を尊重した「傾聴」の姿勢での触れ合いに徹し、運

たショックな光景を打ち明ける人もいる。「いつも二人で遊びに来るあの小学生の兄弟は、両親を津波で亡くし、祖父母に引き取られ育てられているらしい」など境遇を思いやる声も聞かれる。

本会の常駐スタッフは住民からの信頼を得ている、基本的には全国から毎回違うボランティアが訪問する。それが被災者にとって負担にならないかとの心配も当初はあった。しかし、被災の経験や苦しみを胸に抱え続け、それを何度でも人に語りたいという住民にとっては、相手が替わることで気兼ねなく話せるという利点もあることを知った。

### 東日本大震災への立正佼成会の取り組み概要

平成二三年三月一日に東日本大震災と大津波が発生した際、本会は即日に災害対策本部を立ち上げ、翌二二日午後には調査救援隊（後の「善友隊」の第一隊）が出発、先ずは仙台・石巻方面に向かった。そして現地の教会（本会の地域組織）に協力する形で活動を開始し、会員であるかないかの区別なく被災者を支援した。社会奉仕として

管スタッフやボランティア自身の心のケアという観点からも常時「佼成カウンセリング研究所」のスーパーバイズを受けながら取り組んできた。時に応じ、青年による炊出し、看護師による健康相談、茶の湯、季節にちなんだ花見の宴や広場での女子中高生による吹奏楽演奏会なども催した。

開始から二〜三カ月経つと住民とボランティアの双方からアイデアが出るようになり、喫茶と語らいの場という要素に加えて、折り紙やビーズ作り、牛乳パックを利用した作品など様々な手芸も取り入れられてきた。住民の中にそれぞれの技術に長じた「名人」や「先生」がいて、なかなか盛況である。いろいろな工夫を取り入れつつも、活動の主軸は住民を主役とした語らい（傾聴）と心の寄添いに置きたいと思っている。

サロンで語られる話の内容は、守秘のため詳述できないが、震災や津波の経験と一言で言っても、実際は人により異なる。「助けたくても助けられなかった。あの時の声や姿が今も耳や目に残っている」と言う人がいる。「これまで誰にも言わなかったけれど」と、災害後に目にし

は、本会会員が世界の平和を祈りつつ月に数度の食事を抜いて献金した「一食平和基金」から五億円余りを拠出し、被災県・市町村の災害対策本部やNGOの救援復興活動等を支援した。

同時に、各地の社会福祉協議会の災害ボランティアセンター（岩手県・釜石市、大槌町、山田町、宮城県・多賀城市、東松島市、山元町、亘理町）を窓口として、三月末から八月末までに全国会員と本部奉職員による善友隊（災害救援ボランティア）を、延べ六、五八六八人派遣し、被災家屋の泥かき・清掃・荷物の片づけなどを真心込めて行った。その他にも被災者への本会施設の開放、医師・看護師の派遣など種々の活動を実施した。

### 災害時における教団の役割

（活動の目的とプロセスについて）

救援復興に取り組む教団としての目標を「法華経の信仰を基盤に全国の会員がこころひとつになり、最も困難に立たされた人々を思い、必要かつ可能な活動を速やかに適切に行うこと」として、被災者の立場に立った復興